



6次産業化の本質



株式会社 日本経済研究所

常務執行役員

地域本部 上席研究主幹 佐藤 淳

6次産業化が注目されているが、助成は農家の多角化に限定されている。世界に通用するような、ブランド農産加工品を創り、地方創生に繋げるためには、支援対象を農家から地場食品企業に広げる必要があるのではないか。

6次産業化が注目されている。我が国における6次産業化は、一次産業者が二次、三次産業を手掛けることを指す（六次産業化・地産地消法）。農家の多角化のイメージである。6次産業化の取り組みが目立つのは畜産であるが、世界的には有史以来の6次産業であって、日本の加工度が低かったに過ぎない。畜産を6次産業というのはい過ぎであろう。

すると、実際に法が目的としているのは、米や野菜を手掛ける農家の振興（多角化）とっていいだろう。はたして、それは効果的なのだろうか。ちなみに、直売所に野菜や米を納入することまで、6次化と称する向きがあるが、納入先が農協から変わっただけなので、本稿では除外する。もちろん加工品を納入するなら話は別である。

さて、6次産業化（農家の多角化）に関しては、興味深い研究が2つある。まず紹介したいのは、木下（2014）が実施した、岩手県南部の水田地帯の農家に対する調査である（2014：調査数120）。この調査では、約半数が、機械等の導入（53%）、規模拡大（46%）といった大規模水田経営を目指す指向がある一方で、農産加工事業の導入（7%）や新商品の開発（3%）などの、いわゆる6次産業化の動きは鈍いことが示された。これは、水田地

帯では、機械化や大規模化の効果が大きい一方で、6次化の効果はあまりないことを示唆している。

その証左となる調査がある。空閑（2011）は、農林水産省『農業経営統計調査』の個票を用いて（データサンプル1333、2004-2008）、6次産業に取り組んでいる農家と、それ以外の農家の生産性を比較している。その結果、①生産性の水準は6次産業に取り組んでいる農家が高いこと、②一方、生産性の伸び率は、むしろ6次産業に取り組んでいない農家の方が高いこと、が判明した。両者は一見、相反する結果のようにみえるが、生産性の高い大規模農家が、規模拡大の限界から、6次産業に手を広げ、中小規模農家は、大規模化の途上にあると考えると合点がいく。

我が国の農業を象徴する水田地帯においては、規模拡大が効果的である。海外とのコメ生産コスト差の多くはコンバイン等の機械稼働率の差である。そこが生産性改善のポイントとなるので、6次化ではなく、規模拡大に専念した農家の方が、生産性の伸び率は高い。6次化（多角化）は何らかの理由で、それ以上規模を拡大できなくなった農家が、雇用者等の固定費負担を軽減するために実施されている側面があるとみられる。仮に、6次化による高付加価値化が目的であれば、生産性

の伸びが高いはずである。同伸長が低いのは、6次化が代替措置であり、機会費用が高いことを物語っている。

6次産業化のメリットデメリットを整理しよう。デメリット（リスク）としては、多角化に伴うリスクがある。経営資源が分散され、肝心の農業に手が回らなくなる可能性が出てくる。さらに新商品に関する、既存メーカーとの競合リスクや衛生管理に伴うリスクがある。専門の加工メーカーと競うことになるのであるから、これらのリスク（デメリット）は当然だ。

一方、6次化にはメリットも、もちろんある。農産加工品を高級化しようとした場合には、6次化が最も適している。高級ワイナリーのイメージである。高級ブランド品の作成には、原料の特性を十分に引き出さなくてはならず、そのためには、農業部門と加工部門の意志疎通というか、暗黙知に近い微妙なニュアンスが重要となる。

メリデメをまとめると、単なる加工品を超えて、ブランド品を作ろうとした場合には、6次産業化が有利である。一方、単なる加工品を造るだけであれば、6次化するまでもなく、従来通り、加工

業者に任せるべきだろう。その方が、衛生管理リスクや、経営資源分散リスク、他社との競合リスクに晒されなくてすむ。

さて、課題は農家にブランド品を作れるかということと、当該市場があるかどうかである。少なくとも片手間では無理である。最も有望なのは食品加工メーカーが高級化を指向した場合に、原料に凝るパターンである。次に農産加工品の高級化市場は黎明期にある。高級清酒、地ビール、ワイナリーにその兆しがみられる。イタリアの80-90年代の状況に近く、酒類以外の加工食品も早晚高級市場が立ち上がってくるだろう。

高級農産加工品は、これからの地域にとって極めて重要な戦略産品である。上手く行けば、フランスやイタリア型の成長戦略がとれる。その場合、コアになるのは、農家ではなく、食品加工企業である。6次産業化の支援対象を、農家から地場食品企業に広げる必要があるのではないか。

■イタリア・食品産業の高度化

	ワイン	ビール	他の食品
~80年代	テーブルワイン（国内） バルクワイン（輸出）	—	—
1980年代	ランキング・高級化開始	—	安心安全・高級志向
1990年代	高級ワイン（輸出）	輸入ビール↓ 地ビール代替・高級化	スローフード運動の拡大

出所：筆者作成

参考文献

- 木下幸雄（2015）「東北水田農業の経営力」東北活性化研究センター『東北圏社会経済白書』2014年度
 空閑信憲（2011）「6次産業化が稲作経営体の生産性に与える影響について」ESRI Discussion Paper Series No.275
 Garavaglia, Christian（2015）“Entrepreneurship and entry of small firms into mature industry : the case of microbreweries in Italy” *AAWE working paper No.179*, American Association of Wine Economists